

キーワード：
作品展示
日本画
女性像

2014年から2016年にかけて制作された日本画と素描作品および、その間に行われた作品展示の記録と所感。

2014年から2016年にかけて制作された主な作品と、その間に行われた主な作品展示の場での記録と所感を以下に述べていく。

この3年間の制作と展示は、2015年の7月と12月に予定されていた個展を中心に準備がされた。またそこでの展示内容が1985年から2015年までの30年間で制作された作品の展示であったこともあり、自分の今までの制作活動を振り返りつつ、新規の作品制作を行う3年間となったように思う。

2014年12月

小さな素描展 アイセル213階ギャラリー

この展示では、普段日本画の作品を制作するための準備として行われる人物クロッキーとデッサン作品の中から10点を展示した。

モデルには、今回も20代から30代の女性を描かせてもらっている。ポーズは、特に奇をてらったようなものではなく極自然に取れるものをお願いした。加えてモデルの女性には、流行り廃りのないこちらで制作をした描くためだけの白いコスチュームと髪型でのぞんでもらった。

作品は、木炭紙大のものを主とし、木炭と中明度の茶系のパステル（一部に画用鉛筆）によって描いた。比較的短時間で仕上げたデッサンとクロッキーを、簡易なデッサン額によって額装を施した。

	作品タイトル	サイズ(cm)	画材
1	人物Ⅰ	65×55	中性紙・木炭・パステル
2	人物Ⅱ	65×56	中性紙・木炭・パステル
3	人物Ⅲ	65×57	中性紙・木炭・パステル
4	人物Ⅳ	65×58	中性紙・木炭・パステル
5	人物Ⅴ	20×15	中性紙・木炭・鉛筆
6	人物Ⅵ	20×15	中性紙・木炭・鉛筆
7	室内Ⅰ	65×55	中性紙・木炭・パステル
8	室内Ⅱ	65×56	中性紙・木炭・パステル
9	室内Ⅲ	65×57	中性紙・木炭・パステル
10	室内Ⅳ	65×58	中性紙・木炭・パステル

展示会場自体が、窓のないやや照度の低い部屋だったため、壁や床自体も落ち着いた空間の中で、作品を展示することができた。

照明は、電球色のスポットライトのみを使用し、用いた中性紙の黄色味を帯びた色調を生かすように試みた。

会場は、ギャラリーに隣接した学習室や会議室の利用者が行き来する場に面しており、少人数ではあるが、常時作品を静かに眺める人に恵まれた。

作品制作の初期段階に生まれてくる素描は、絵の具による本画制作が終わると、同時にカルトンにしまわれてそのままになりやすい。このように素描のみが、長時間展示されることで、作品が生まれる前に感じていた素描からの素の印象が思い出された。絵の具での制作を行う上での制約や絵の具そのものの性質によって、素描の初期段階で得られたものの中の一部は、別の形に置き換えられていく。その工程自体は、繰り返され、あまり不満も疑問も持たずに慌ただしく制作を進めすぎていた事を改めて感じた展示となった。

2015年7月～9月

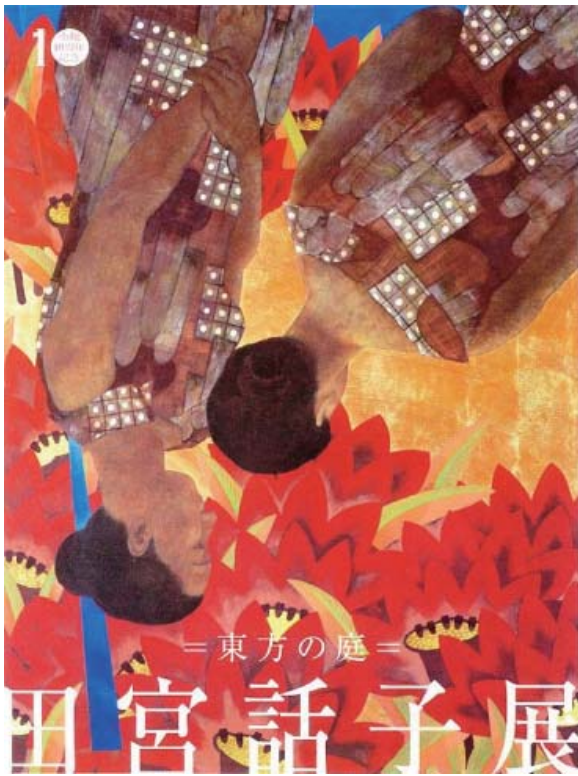
東方の庭 田宮話子 作品展 掛川市二ノ丸美術館

この作品展の企画を頂いたのは、2012年で、そこからこの個展の準備を中心に制作やその他の展覧会への参加を調整していった。しかし、他の展示の会期時期の変更や、思うように進まない準備などに追われ、やや時間に追われてしまった感がある。

そんな中、学芸員の方々の提案とフォローのおかげで展示内容やレイアウトの整理が行われた。

企画から展示までの数年間は、制作した私自身の思い込みや、あまり必要のないこだわりが、一つづつ自分の中や美術館の中で再検討され、作業を進めていく時間となった。

また、この展示にあわせて30年間の制作を振り返るための図録を制作する事になり、出品をしない作品についても改めて棚卸しをするような作業がはじまった。その中で30年間における自分にとって大切な作品がどの時期に多く生まれたのかも、明確になって



いったように思う。

美術館自体は、二室のみではあるが、普段の制作や展示では中々得られない高い天井の展示室での、150号から100号を中心とした作品展示は、自分自身にとっても久しぶりに見るものも多く有意義なものとなった。

展覧会の期間中には、ギャラリートークが二回と、美術館友の会の方に向けての作品解説日があり、作品が生まれてくる段階から作品の完成や、日本画という画材や技法そのものについての解説も行う事になった。

普段は、あまり接点のない年配の方々からの日本画や、現代の日本画のあり方についての質問が大変多く寄せられ私自身にとっても、自分の制作の立ち位置が再確認される場面もあった。

自分の作品の成り立ちを説明するために持参した、日本画に転向する前の版画作品にも、多くの質問を頂いたことが、この個展の後に行った展示内容に、日本画を始める前の自分の作品も多く盛り込み変化させていった。

■東方の庭 主な展示作品				
	作品タイトル	制作年	サイズ(cm)	画材
1	自画像	1988	F6号	岩絵の具・絵絹・膠
2	室内I	1990	F80号	岩絵の具・綿布・膠
3	踊り	1991	F50号	岩絵の具・麻紙・膠
4	夕日	1990	F80号	岩絵の具・麻紙・膠
5	東の風を迎える	1992	F150号	岩絵の具・麻紙・膠・金箔
6	草上にてI	1996	181×200	岩絵の具・麻紙・膠・金箔
7	草上にてII	1996	181×201	岩絵の具・麻紙・膠・金箔
8	パラレルな流れ	1997	162×260	岩絵の具・麻紙・膠・金箔
9	香久の国	2002	F150号	岩絵の具・麻紙・膠
10	香久の国	2015	F100号	岩絵の具・麻紙・膠
				他20点

2015年11月～12月

ART WORKS 1985-2015 田宮話子 作品展
沼津市庄司美術館

当初は、2014年10月に行う予定となっていた展示が、美術館のスケジュール変更が生じたことで2015年の12月に行われる事になった。掛川市での個展と同じ年に、同じような展示内容になってしまうのを避けるために、この美術館の特色でもある版画を展示内容に加えたものにした。その結果1985年から30年間に制作された作品による回顧展としての展示という内容に落ち着くこととなった。

1988年に日本画を学び始めた以降は、ほとんど展示をすることもなくしまい込んでいた20代で制作したシルクスクリーンとリトグラフによる作品を棚卸をした。傷んだマットや額から額装しなおし、日本画のいつもの作品たちと同じ空間に置く事は、初めての試みであったが、バランスよく空間に収まってくれた。1988年を境にどこか分断していた感のある自分の制作活動が、この展示を行う事で初めて一つに繋がったように思えた。また繋がる事で、やり残し見て見ぬふりをしていた造形上の課題も浮かび上がり、大変良い学びの場を頂けた。

その他、2014年から2016年までにかけての主な出品は以下となったが、新作を描きながら今までの30年間に描いた作品と向き合う3年間だったといえる。

忙しさにかまけて、保留にしたままの課題が、版画を制作していた頃からのものであったこと。また、未熟であっても怖がらずに描いていた頃の自分の作品に、再会し思い出した事など、いつもは中々考える事のない課題と共に過ごした。ここからまた始まる今後の制作に、反映させていきたいと考えている。

■その他 主な出品			
	会期	会場	出品作品
Shinpa展2014	2014年2月	小布施ミュージアム	庭の声 181×76cm
2.7アート&ガラス展	2014年4月	森田画廊	紅い花 F0号
Shinpa東京展2014	2014年7月	佐藤美術館	巡回展
Shinpa展2015	2015年2月	小布施ミュージアム	香久の国 F100号
Shinpa東京展2015	2015年7月	佐藤美術館	巡回展
田宮話子展	2015年10月	ギャラリー未来	香空と F10 他10点
風神・雷神展	2016年2月	池袋西武アートフォーラム	哈神・追風 S10号 2点
寺・あお・蒼展	2016年11月	北アルプス展望美術館	cloud F150号



東方の庭 掛川市二ノ丸美術館



ART WORKS 1985-2015 沼津市庄司美術館



田宮話子新作展 ギャラリー未来（岡部町）